2023.3.23

文学部　学部基幹科目（2019年度以降第1学年次入学者適用）

区分	科目名	履修開始セメスター	1 社会のさまざまな事象について、建学の理念によって培われた倫理観に基づいて判断を下し、かつ修得した知識を活用して社会的責任を果たすことができる	2 日本、中国、英語圏の諸言語・諸文化に関するそれぞれの専門領域において、深い知識と理解力を身につけている	3 日本、中国、英語圏の諸言語・諸文化に関するそれぞれの専門領域において、テーマを設定して自らの見解をまとめることができる	4 選択した専門領域以外の関連領域について、基礎的な知識を身につけている	5 国際交流の場において、相互理解のために情報の受信者あるいは発信者として活動できる一定の知識と能力を身につけている	科目概要
学部基幹	中国語と中国文化	1		○		○		中国語は多くの学生にとって身近な言語でありながらも未習の言語であるが、言語として中国語を知れば足りるものではなく、その言語の生み出した文化の学習も不可欠である。「中国語と中国文化」は、中国文化に対する理解を言語を通したアプローチによって深め、かつその言語に関心を高め、学習を動機づけることをめざす。この授業では、中国語を日本語・英語と比較しつつ、その文字、発音、文法、語彙等の面から解説し、挨拶や自己紹介などの簡単な表現を学習する。中国文化に関しては、その歴史と現在の姿をさまざまな資料やDVDに基づき紹介する。
	英語と英米文化	1		○		○		英語は多くの学生にとって中学校および高等学校で既習の言語であるが、言語として英語を知れば足りるものではなく、その言語の生み出した文化の学習も不可欠である。「英語と英米文化」は、英米文化に対する理解を言語を通したアプローチによって深め、かつその言語に関心を高め、学習を動機づけることをめざす。この授業では、既習の知識と比較しつつ、中・高では学ばない英語の知識について文字、発音、文法、語彙、表現等の面から解説し、英語の新しい側面を学習する。英米文化に関しては、その歴史と現在の姿をさまざまな資料やDVDに基づき紹介する。
	世界の言語と文化（朝鮮語）	1		○		○		地球上にはさまざまな言語によって生み出されたさまざまな文化があり、言語として英語や中国語のみを知れば足りるものではない。「世界の言語と文化」は、世界の文化の多様性に対する理解を言語を通したアプローチによって深め、かつその言語に関心を高め、学習を動機づけることをめざす。この授業では、朝鮮語を日本語と比較しつつ、その文字、発音、文法、語彙等の面から解説し、挨拶や自己紹介などの簡単な表現を学習する。朝鮮語圏文化に関しては、その歴史と現在の姿をさまざまな資料やDVDに基づき紹介する。
	世界の言語と文化（ベトナム語）	1		○		○		地球上にはさまざまな言語によって生み出されたさまざまな文化があり、言語として英語や中国語のみを知れば足りるものではない。「世界の言語と文化」は、世界の文化の多様性に対する理解を言語を通したアプローチによって深め、かつその言語に関心を高め、学習を動機づけることをめざす。この授業では、ベトナム語を日本語と比較しつつ、その文字、発音、文法、語彙等の面から解説し、挨拶や自己紹介などの簡単な表現を学習する。ベトナム語圏文化に関しては、その歴史と現在の姿をさまざまな資料やDVD／ビデオに基づき紹介する。
	世界の言語と文化（フランス語）	1		○		○		地球上にはさまざまな言語によって生み出されたさまざまな文化があり、言語として英語や中国語のみを知れば足りるものではない。「世界の言語と文化」は、世界の文化の多様性に対する理解を言語を通したアプローチによって深め、かつその言語に関心を高め、学習を動機づけることをめざす。この授業では、フランス語を英語と比較しつつ、その文字、発音、文法、語彙等の面から解説し、挨拶や自己紹介などの簡単な表現を学習する。フランス語圏文化に関しては、その歴史と現在の姿をさまざまな資料やDVDに基づき紹介する。
	世界の言語と文化（ドイツ語）	1		○		○		地球上にはさまざまな言語によって生み出されたさまざまな文化があり、言語として英語や中国語のみを知れば足りるものではない。「世界の言語と文化」は、世界の文化の多様性に対する理解を言語を通したアプローチによって深め、かつその言語に関心を高め、学習を動機づけることをめざす。この授業では、ドイツ語を英語と比較しつつ、その文字、発音、文法、語彙等の面から解説し、挨拶や自己紹介などの簡単な表現を学習する。ドイツ語圏文化に関しては、その歴史と現在の姿をさまざまな資料やDVDに基づき紹介する。

日本文学科　専門科目（2019年度以降第1学年次入学者適用）

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科基礎	入門ゼミ	1	△		○		初年次導入教育をめざし、大学教育への定着を図る。「講義ノートの取り方」から始め、「大学図書館での情報収集」、あるいは「リポート作成の手順」、さらには「プレゼンテーションの基本スキル」など、今後展開していく専門課程の教育へと向かうための手続きを学ぶ。また、いかに読むか、いかに書くか、情報はいかにして集めるか、などの講義を通じ、優れた文章がどのように組み立てられまた書かれているかなどをグループで発表し、日本語によって表現された文章の魅力と味わい方を学ぶ。
	漢文学１	3	◎	△		△	日本古典文学の基礎を形作る「漢文」を理解するための漢文法を講ずる。漢文特有の文型の習得を通じて、漢文訓読の基礎学力を養う。具体的な内容として、いわゆる漢文の文法的な構造について、先人の発明した訓読の特徴を理解するため、日本語の文法と漢文法(古代中国語文法)との違いを克服する返読の発生の必然性を、分かり易く説明し、元来は全く体系を異にする古代中国語との触れ合いを通じ、先人がいかに苦労して中国語を日本語化し、同時に日本語の表記法を確立させていったのか、日本文化成立の根幹に関わる問題を提示する。
	漢文学２	4	◎	△		△	漢文学は、古来日本人が中国文化を受容し、殊にその表記法である漢字を日本語の表記に転用し、加えて、古代中国語文献に対する深い理解により、いわゆる漢文を表記することによって成立した。ところが、日本語と漢文の間には、体系を異にする二国間言語における返読の問題が発生した。漢文学を具体的に理解するには、その返読という現象をしっかり学ぶ必要がある。そこで、本授業においては、漢文法の体系を踏まえ、漢文を読解する鍵となる、返読文字、再読文字の理解に加え、否定、疑問、反語、使役、仮定等の基本句形を習得することにより、漢文訓読能力を身につける。
	書道１	1	◎				楷書の実習。楷書を学ぶことによって書道の基本的な知識・技術を身につける。中学校の書写・高等学校の書道の指導ができるような力をつけることが到達目標。楷書の用筆法・結構法等を学び、技法を高めていく。古典の臨書を中心に、太字・細字を数多く学習する。さらには、書の表現時における精神的な高まり、意識の集中力を養い、その歴史・文化の学習を通して「書く」という行為の深化を図る。
	書道２	2	◎				行書・草書の実習。行書・草書を学ぶことによって書道の基本的な知識・技術を身につけ、あわせて書の実用性と芸術性を学習する。中学校の書写・高等学校の書道の指導ができるような力をつけることが到達目標。行書・草書の用筆法、特に楷書との違いを理解し、筆順の変化等の解説を聞くことで、行書・草書の特徴をよく把握する。古典の臨書を中心に太字・細字を数多く学習する。半紙の指導を中心として受けつつ、画仙紙（半切）作品にも挑戦し、書を学ぶ楽しさを味わう講義でもある。
	日本文学概論１	1	○	△			日本古典文学を理解するための技術・知識を身につけ、自分の興味あるテーマについて主体的に調べ、考えるための基礎力を養う。そのために、日本古典文学作品および日本古典文学史に基づいた講義となる。具体的な文学作品の読解を通して、広く日本古典文学作品を理解するための知識・技術を身につけるとともに、日本古典文学研究のための素養や思考方法をも学んでいく。また、課題作成等を通じて、単なる読解の技術の修得にとどまらない、個々のテーマについて自分で調べ考える「知的基礎体力」を鍛えることも目指す。
	日本文学概論２	2	○	△			日本近・現代文学を理解するための技術・知識を身につけ、近代文学の特質とその世界観を理解する。そのために、日本近・現代文学作品および日本近・現代文学史に基づいた講義となる。明治から昭和戦後期にかけての、日本近・現代文学作品（近代小説、および和歌、俳句を含む詩歌の名作）を読解し、必要に応じて作家や詩人（歌人、俳人を含む）の生涯にも触れる。作品に描かれた出来事や思想、文学者の生き方などを通して、人間存在のありようについて考察を深め、近・現代社会の中で生まれた文学作品に対する読解や研究の姿勢を学ぶことを目指す。
	日本文学史１	3	○	△			古代から、現代に至る、日本文学の流れを視野に入れつつ、この科目では、上代から近世までの日本文学史について、ジャンルの展開、各作品、作家、時代思潮と文学の関係をとりあげて理解を深める。例えば、古伝承、記紀風土記、歌謡・和歌文学、説話文学、日本漢文学、物語文学、日記文学、随筆、仏教文学、の流れと相互交流、代表的作品、作家について、歴史的・文化的背景、社会と作家自身の問題などとの関係に留意して、体系的に、かつ文学が生き物であることを感得できるように、講義する。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科基礎	日本文学史２	4	○	△			日本文学における近代から現代についての文学史を中心に、様々な分野にわたって具体的な作品をとりあげて、その成立・書誌・諸本・表現・主題・受容などについて講義する。それぞれの作家および作品についての基礎的な知識を学びながら、日本の近代文学が成立した歴史的背景・政治的背景・思想史的背景・文化史的背景などを考慮してその変遷を理解するのが目標である。
	日本語学概論１	3	○	△			日本語の基礎的な事柄について理解を深める。音声と音韻、文字と表記、意味と語彙などを学ぶ。
	日本語学概論２	4	○	△			文法、文体、方言・共通語について学ぶ。また、上代・中古・中世・近世・近代・現代の日本語の歴史を概観する。
	京都と文学（古典）	1	△	◎			京都という立地条件をいかして、古典文学・古典文化の生成・展開の地理的背景を、作品の読解・解説と文学地理の確認、現地訪問等により、体験的に理解し、地理的条件と文学表現との連関を理解する。京都的自然・風土が、平城京の都市文化を継承発展させて、日本文化の本質形成に決定的に関与し、日本文化の母体を形成していったことを知る。そのエッセンスが、古代・中世を経て変容を重ね、近世文学・文化に流れ込んでいったことをみる。
	京都と文学（近・現代）	2	△	◎			京都という伝統文化都市が身近にある立地を生かし、近・現代文学作品とその成立の現場とのつながりを体験的に理解する。文学作品発表当時の文献資料に触れたり、実地調査（フィールドワーク）を行ったりする活動を通して、文学作品とそれを生んだ土地、風俗、文化、社会との関わりへの認識を深める。さらに、日本近代文学の作家、詩人たちが作品に織り込んでいった〈京都〉の象徴的意味と、作品の主題について考察する。授業は、教員による文学作品と京都についての講義、学生が実際に作品の舞台を訪れるフィールドワーク、その結果の調査報告、という内容で行う。
	日本文学初学び	1	◎	△	△		高校時の「国語」とは異なり、大学の文学関係では、その分野は「上代・中古・中世・近世・近代」と大きく五つの時代に区切られている（近代はさらに四つの系へと）。のみならず本学にはその他に「日本語学・日本語教育・書道文化」がある。このように多くの分野があることを理解するとともに、各分野のエッセンスを提供し、その特色と奥行きの深さを実感する。「研究」の導入期間にあって各分野の本物に「触れる」ことを目的とする。
	文献学入門（版本）	1	◎	○			入学直後より、古典籍の実物（版本）に接触し、それを読みこなす能力および古典籍調査方法の基礎を習得し、二年次以降の専門領域の学習につなげる。そのために、まず、くずし字（就中、変体仮名）を解読するための訓練を行う。江戸時代～明治初期の様々な文学作品の翻刻を繰り返し行うことにより、解読のための基礎的能力が身に着く。次に、版本の現物を用いて書誌学調査を繰り返し実践する。その過程で、版本の部位構成や時代による変遷、ジャンルごとの造本形式の違い等が習得できる。近世の出版メディアの実態についても学習する。
	文献学（古筆）	2	◎	○			文献学(フィロロギー)は、日本文学、取り分け、日本の古典文学を研究するための基礎的研究方法の名称であり、その具体的な内容は、1書誌学、２本文批判、３注釈学、の三本柱から成っている。書誌学とは、書物に関する学問のことで、書物を容器に例えれば、その中身が本文であり、中身の本文を扱うのが本文批判である。本文批判とは、本文を科学的に定立するための作業を言い、古筆とは、その作業が古写本を対象とすることを意味している。当科目は、写本を具体的に解読するためのくずし字の習得、特に変体仮名の習得を中心として、カナの起こりから漢文と日本語等との関連など、古典テキストの成り立ちを、幅広い観点から学問的に捉え直すことを目的とする。
	文学概論１	3	○	△		△	文学とはどのようなものかを言語の発生とその展開を視野に入れて理解させる。その上で日本語の持つ表現の普遍性と特殊性などを考察する。また、現代の文学の状況についても、社会や教育、さまざまなメディアを論じた文章を通して、文学の意義と課題を明らかにする。
	文学概論２	4	○	△		△	比較文学的な視野をも含め、日本文学の特色を言語や歴史、風土とのかかわりを通して理解することをめざす。古代以来の中国文化との濃厚な関係、近代における急速な西欧化、をはじめとして、海外の文化との関係において形成、展開した日本語や日本語の文学の特質を探求する。また、今日の文学の現代を、メディア、映像、音楽、マンガ、教育などのさまざまな場面において考察し、文学の意義と課題について認識することをめざす。毎回の授業の主題に応じた課題を学生に与え、その課題の発表・提出を通して理解を深める活動も適宜実践する。
	日本語文法１	1	◎				高校までの「国語」の授業の中で扱われる「文語文法」。これを身につけていないと、古文を自力で正確に読むことは難しいのだが、意外と身についていない学生は多い。そこで、本授業では、毎回、まず平安朝の文法を中心とした文語文法の基礎についての講義があり、そのあとで練習問題を解くことにより、文語文法の定着を図る。なお、この授業で扱う文語文法の項目は、動詞、形容詞、形容動詞を中心とするが、更に、名詞、連体詞、副詞、接続詞、感動詞にも触れる。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科基礎	日本語文法２	2	◎				高校までの「国語」の授業の中で扱われる「文語文法」。これを身につけていないと、古文を自力で正確に読むことは難しいのだが、意外と身についていない学生は多い。そこで、本授業では、毎回、まず平安朝の文法を中心とした文語文法の基礎についての講義があり、そのあとで練習問題を解くことにより、文語文法の定着を図る。なお、この授業で扱う文語文法の項目は、付属語（助詞、助動詞）、敬語、修辞法（枕詞、序詞、掛詞）などである。
	言語学概論１	3		○		◎	ヒトは＜ことば＞によって思考し、コミュニケーションをする。ヒトのことばと動物の伝達とを観察して、ヒトのことばの特性を考える。次に、言語の修得について観察する。そうして獲得された言語が、どのような形をもっているのかを、音韻・文字・語彙・文法について考察する。そして、言語の構造・発音記号の役割などを考える。次に、ことばを発する際の心の動きを考え、実際に発されたことばが、言語場において、どのような意味をもち得るかを考える。
	言語学概論２	4		○		◎	ヒトはひとつの言語共同体の中に生まれる。母語と第一言語、方言と標準語・共通語など、社会的な言語の変種について考察する。次に、時間的な言語の変化について考察する。二つ以上の言語が接触した場合に起こる言語借用や言語連合、あるいは、二言語使用や言語紛争の実態を知り、言語政策について考える。最後に、さまざまな要因によって、時間的にも空間的にも変化してきた言語を、系統や類型によって分類し、それぞれの言語と文化の関わりをさぐる。
	中国書道史	3	○	◎		△	中国における漢字各体の生成を概観し各時代の書道史を概観する。歴史の流れの中で、個々の名蹟や能書を適切に位置づけるとともに、個々の様式や技法を生み出す時代状況への理解を深める。さらには、日中の書法交流史の立場から魅力ある講義となるよう工夫する。
	日本書道史	4	○	◎		△	日本における書道史を概観し、各時代の歴史の流れの中で、個々の名蹟や能書を適切に位置づけるとともに、さまざまな時代状況への理解を深める。特に、古筆の尊重ということについて必要な知識を身に着けるとともに、京都で書を学ぶ意義についても考える場とする。
	書道文化入門	1	◎	△		○	書道の基礎的な教養、技術を会得することを目的とする。前半は、楷書の生成過程を通史的に追って学習し、楷書完成へのプロセスを熟知する。後半は、選別された行書と草書の名品を学び、それらの歴史的価値を理解する。これらの講義・実習を通して、用筆法・結構法・執筆法・筆勢・筆意・品致・骨法等の書道における基本的概念を理解・体得する。さらに、各古典の文化的背景、作者の人物像などの解説により、書道に対する理解を一層深める。
	ことばと表現（古典）	1	◎	△			古典文学の代表的作品に触れ、文章表現やことばの意味、それらの時代による変化について具体的に学習する。文学史上の代表的な作品の場合、古くから注釈書がそなわっている例が多い。この授業では注釈書を複数参照することにより、後代の理解とその推移が学習できる。また、これらの作品を種本として再利用した後代の諸作品の特徴などを示し、ことばと表現の多様性・重層性についても理解する。さらに、受講者自身が古典文学作品を利用して創作表現を実践することにより、ことばへの関心と理解が深まるとともに、自在に駆使する能力が身に着く。
	ことばと表現（近・現代）	2	◎	△			日本近現代文学作品を具体的にいくつか取り上げ、その作品を成り立たせている「ことば」と「表現」に注目することで、文学作品について深く考察する。「ことば」と「表現」に注目したとき、そこから浮かび上がってくる登場人物の心理や状況とはいかなるものか。そのことを検討する過程で、作家論・作品論、記号論、作品の構造、語り手と視点、日本語の言語習慣、物語内容・物語言説の時間、現実と虚構などに触れ、日本近現代文学のみならず、古典や外国文学なども含めて、文学を研究する上で必要となる基礎的な考え方について学習する。
学科専攻	日本文学講読（上代）	2	◎	○			古事記・日本書紀・風土記・万葉集・懐風藻等を対象として、作品の成り立ち、本文、ジャンル間の性格の相違、影響等を理解する。読解・解説を行い、総体としての古代性を明らかにする。神話・伝説等の口承文芸から、書承・記載文芸への流れを理解し、日本文学・文化の古代性を知る。上代文学を理解するには、上代日本語の知識が必要なことを知り、その知識を作品読解に結びつける方法を学ぶ。
	日本文学講読（中古）	2	◎	○			中古の文学作品・作家に関し、具体的に作品を取り上げ、読解・観照を行い、講義する。授業内容としては、作品（題名、作者、成立、構成、伝本、研究史、注釈書、研究書など）・作家（氏名、経歴、伝記、他作品、研究史、研究書など）についての概説を行い、講義に用いるテキストの説明を経て、（影印本なら翻字から）本文異同、語釈、有職故実、時代背景、口語訳、作者の個性、文学意識の解説、鑑賞などを行う。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科専攻	日本文学講読（中世）	2	◎	○			日本文学における中世文学とは、鎌倉時代、室町時代の文学を言う。貴族が政治・文化の中心を担った中古文学（平安時代文学)に対し、新たな武士階級が台頭、幕府をつくって政治を担った中世の文学は、従来の和歌、物語文学などを継承、深化させる一方で、連歌や軍記物語、説話文学や能、狂言など、平安時代には見られなかった中世独特の新たなジャンルを生み出し、中世の文学を特徴付けることとなった。当科目では、中世文学を特徴付ける諸ジャンルの中から、中世文学史を形作る諸作品を選び出し、研究・講読することによって、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代というそれぞれの時代の文学の特質を深めてゆきたい。
	日本文学講読（近世）	2	◎	○			近世文学作品より一つないし複数の作品を精読する。作品中の言葉の意味や、その時代背景についてひとつひとつ調べながら読み解いていくことにより、作品を解釈するための基礎的方法が身に着く。また、その作業を通して当時の社会制度や風俗等に関する知識や教養を深めていくとともに、これまでの研究史を整理し再検討を加え、授業でとりあげたもの以外の先行・後続する文学諸作品との関係について考察を加えることにより、近世文学作品を読み解くための基礎的方法が習得できる。
	日本文学講読（近・現代）	2	◎	○			近代文学が成立し、現代にかけて展開していく過程を具体的な作品を実際に読んで、個別的理解によってたどって行く。場合によっては、現代の学生には古文に準ずる擬古文の作品をも含めて、読解していく。その場合には、基礎的な古典文法や古文の知識が必要になる場合もある。具体的な作品の理解であるから、作品の舞台となったさまざまな地域と歴史・文化についての知識も修得しつつ、学習する。作品によっては、外国文化との交流についても目配りをしつつ読解を進めていく。
	日本文学作品研究（上代）	2	◎	○			古事記・日本書紀・風土記・万葉集・懐風藻等を対象として、主にその中の１作品を中心に、中国文学・文明の影響を含めた、その成り立ち、本文、作品の性格・特質、他作品、他ジャンルとの相互影響等を、課題を定めて研究的に明らかにし、上代文学への理解を深める。神話・伝説等の口承文芸と書承・記載文芸との関係を理解し、日本文学・文化の古代性を知り、作品を記述している上代日本語への理解を深める。研究の方法を学び、卒業研究、卒業論文作成に役立てていく。
	日本文学作品研究（中古）	2	◎	○			中古の文学作品・作家に関し、具体的に作品を取り上げ、その作品の持つ文学的問題を取り上げ、研究的に講義する。その問題としては、作品（題名、作者、本文、成立、構成、伝本、中国文学など他分野の影響・関連、研究史、注釈書、文学性、評価など）・作家（氏名、経歴、伝記、他作品、研究史、評価など）であり、特定の課題を定め、問題意識、研究方法、先行研究などに言及しつつ、講義を行う。それを通じて、研究の方法を学び、卒業研究、卒業論文作成に役立てていく。
	日本文学作品研究（中世）	2	◎	○			文治元(1185)年、源頼朝が鎌倉に幕府を立てて後、歴史的には鎌倉時代、文学史的には中世、と呼ばれる時代に入った。中世文学は、鎌倉時代、続く南北朝時代、室町時代を含む、江戸時代(近世)より前の文学を言うが、中世には、軍記物語や説話文学を始めとする、平安時代(中古）とは一線を画する諸ジャンル、諸作品が数多く作られ、中世文学を特徴あるものとしている。当科目は、中世文学の軍記物語や説話文学など、中世文学史に生彩を与える作品に焦点を当て、日本文学、日本文化を文学史的な観点から、具体的により深く理解することを目的として、諸作品の研究、講読を行ってゆく。
	日本文学作品研究（近世）	2	◎	○			近世文学作品より、特に従来研究史上で解釈や議論の分かれる作品を一つないし複数選び、とりあげる。問題になっている点について批判的検討を加えつつ精読する。先行研究の成果と問題点を正確に判断し、多様な読解を試みることのできる応用的能力が身に着くとともに、近世文学研究の基礎的な能力が身に着く。当時の社会制度や風俗等に関する知識や教養を深めていくとともに、様々な文学ジャンルに対する理解を深め、近世の多様な文学あるいは文学以外の書物を自在に読みこなし駆使する能力が養成される。
	日本文学作品研究（近・現代）	2	◎	○			日本の近代文学・現代文学を研究および考察の対象として、さまざまな小説・詩・短歌・俳句・随筆・評論などを日本近・現代文学研究の立場から、分析的・研究的に読む方法を実際の例に基づいて講義する。作品の読解の鍵となる手がかりをとらえる。作品全体の構造を分析する。周辺の歴史・思想・文化的情況との関連を考える。そのほかさまざまな方法によって、読書感想文ではない、客観的な作品理解をする方法の修得を目指す。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科専攻	漢文基礎	2	◎	○		△	漢文とは、中国の古典の文章のことだが、日本文学において漢文と言う時には、まだ文字を持たなかった有史以前の日本人が、進んだ大陸文化を学び始めて以来のそれを指す。日本人は漢文を学ぶことによりカナを発明し、漢字と仮名を用いて日本語を表記することを可能にした。ところが、日本語と中国語とでは文法構造などが異なるため、私たちの祖先は、漢文を読むための様々な苦心を重ねた。返り点や送り仮名などの発明がそれである。今日の日本語表記は、その上で可能となったものだが、当科目では、様々な例文を通じて、漢文訓読法を習得することを目的とする。同時に、仮名と漢字の関係等を深く理解することにより、日本語と日本文化の成り立ちを考えたい。
	日本語学講読	2	◎	○			文献（時代を問わず日本語に関する情報が豊富に読み取れるもの、あるいは近世や近代において学者が日本語を研究したもの）を一点ないし複数取り上げ、精読する。その文献の背景や内容の詳細な検討を通して、文献の扱い方、音韻・文法・語彙・表記などの日本語に関する知識、日本語を研究する方法などを学ぶ。
	日本語学作品研究	2	◎	○			文献（時代を問わず日本語に関する情報が豊富に読み取れるもの、あるいは近世や近代において学者が日本語を研究したもの）を一点ないし複数取り上げ、それに基づき研究的な講義をする。文献から読み取れることや文献を扱うにあたって注意すべき点、日本語に関する情報の読み取り方や研究への活かし方、考え得る問題点やその文献を扱うにあたってのメリット・デメリットなどを、講義を通して学び習得する。
	書道文化講読	2	◎	○		△」	中国書道史上の、書論・書人の伝記・書作品の内容などについて講読する。漢文の知識がどうしても必要なため、その基礎知識の確認後、専門的基礎知識を高め、講読に入る。書人の伝記等を、わかりやすく解説し、講読する。あわせて、その人物の生きた時代や文化についてふれ、内容的に充実したものとする。また後半は実技を加え、その書美を追体験する。
	書道文化作品研究	2	◎	○			日本書道史上の書論・書人の伝記・書作品の内容について講読する。漢文・古文の知識がどうしても必要なため、その基礎知識の確認後、専門的知識を高め、講読に入る。古典的書論の多くは、現代書道界に核心をついた正論であり、意味深いものがある。さらに、変体仮名の知識についても基本的な知識を高め、時代や他の文化との関係についてもふれ、充実したものとする。
	日本文学特講（上代）	3	◎	○			上代文学の主たる作品について、テーマを設定し、現在の研究状況を踏まえて、概説、講義する。学生が、個別の作品を読み解く力を付けると同時に、同時代に生み出された異なる作品間の関連性を考える視点を養い、上代文学を総体的に考察する力を培えるようにする。記紀における神話と伝承、歌謡と物語、恋愛と反乱伝承、相聞歌の世界、挽歌の語りなど、一定のテーマに基づきながら、かつ上代文学全体に視野を広げていく授業とする。
	日本文学特講（中古）	3	◎	○			中古の日本文学上の問題について、テーマを設定し、現在の研究状況を踏まえて、概説、講義し、学生が中古文学の研究状況を理解し、レポート作成、卒業論文執筆につなげられるようにする。取り上げるテーマとしては、勅撰三漢詩集における君臣唱和の様態、万葉集から古今集への展開と和歌文学への漢文学の影響、物語文学の成立と本性、私家集と物語との交渉、女流日記文学の文体と自照性、説話文学の展開と社会の流れ、などが考えられる。
	日本文学特講（中世）	3	◎	○			中世文学の中から、軍記物語等のジャンルを取り上げ、その生成と展開、終焉までの流れを体系的に捉えつつ、その特徴を講ずる。具体的な内容は、例えば軍記物語の場合は、古代末期における合戦記録の発生から、和漢混淆文を表記法とする軍記物語成立の諸問題、国民文学として評価の高い平家物語の主題、諸本、語り、灌頂巻の成立論や、太平記に見られる軍記物語の変質、義経記・曽我物語を代表とする英雄物語の派生や後期軍記との関係などである。
	日本文学特講（近世）	3	◎	○			近世文学研究のこれまでとこれからを学ぶ。授業では、近世散文作品あるいは韻文作品のなかから複数の作品をとりあげ、各作品をさまざまな視点から読み解くことによって、近世文学の面白さを味わいつつ、その時代の文化に対する理解を深める。また、研究史におけるこれまでの成果と問題点を浮かび上がらせ、今後の課題について検討し、その実証的な解決方法を模索する。諸問題の実証的な解決方法を知ることで、研究の方法とその楽しさを体感し、学生自身の調査・研究につなげることを目標とする。
	日本文学特講（近・現代）	3	◎	○			日本の近現代の文学に関して、文化的背景、社会的背景、歴史的背景、思想的背景を視野に入れつつ、研究する事例について、実際に学習する。その際、文学史的知識を確認しつつ、文学史とさまざまな背景とがいかに関わっているかに注意を払いつつ学習する。たとえば、ある作品について、同時代の批評家が論評していた場合、現在の評価とはちがった評価がなされることが多いが、その理由を考える、といった学習である。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科専攻	日本文学特殊研究（上代）	3	◎	○			上代文学について、講読や作品研究などで身に付けた、主要作品に関する基礎的な知識に基づき、さらに高度で専門性の高い知識と考察方法とを身に付けるための授業とする。記紀・万葉と風土記の伝承、上代文学と仏教、万葉歌人と懐風藻詩人、万葉集と漢詩文など、発展性を持たせたテーマを設定する。記紀、万葉など主要作品の特殊な領域や、記紀、万葉以外の上代文献にも視野を広げ、上代文学の特質について多角的な視点から考察する。
	日本文学特殊研究（中古）	3	◎	○			中古の日本文学上の問題について、担当教員の目下の研究と関連付けてテーマを設定し、現在の研究状況を踏まえて、問題の本質、問題の究明および方法、研究結果の見通し等を講義し、学生が中古文学の研究状況を理解し、日本文学の研究について見識を深め、レポート作成、卒業論文執筆につなげられるようにする。
	日本文学特殊研究（中世）	3	◎	○			中世文学の中から、説話文学等のジャンルを取り上げ、仏教、漢文学との関わり、特に唱導(講経)及び、その裏面をなす注釈、幼学との関わりに留意しつつ、そのジャンル的特徴を講ずる。具体的な内容としては、まず説話文学の概念規定と現在の研究状況の概観から、仏教文学としての側面と中国俗文学との関係、また、唱導(注釈・幼学)との関係に留意しながら、他ジャンル例えば軍記物語、早歌、謡曲などの芸能、中世小説(御伽草子)などにおいて果たした説話文学の役割などに触れる。
	日本文学特殊研究（近世）	3	◎	○			近世文学研究の最先端に触れる。この授業では、散文などのテキスト作品のみならず近世演劇からも複数の作品をとりあげ、各作品をさまざまな視点から理解し読み解くことによって、近世の文学の種々のスタイルの面白さを味わいつつ、その時代の文化に対する理解を深める。また、文学研究史のこれまでの成果と問題点を浮かび上がらせ、今後の課題について検討し、その実証的な解決方法を模索する。諸問題の実証的解決方法を知ることで、研究の方法とその楽しさを体感し、学生自身の調査・研究につなげることを目標とする。
	日本文学特殊研究（近・現代）	3	◎	○			日本近・現代文学作品を題材に、作品を研究の観点から分析的に読む実例を講義し、学生が独自の観点で作品を読解する力を養う。作品中に頻出するキーワードとなる語句を手がかりとしたり、作品全体の構造を俯瞰的にとらえたりといった、読解のための技術を獲得することを目標とする。素材とする作品について、それぞれのエピソードが持つ意味あいに留意し、精妙に組み立てられた作品世界のありようについて考えていく。これらを通して、「感想」を主とした読み方ではなく、対象としての作品そのものに内在している仕組みや文学的な表現の秘密を明らかにしていく読み方を訓練する。
	日本語学特講	3	◎	○			歌学書、江戸時代・近代の文法書などを読んで、日本語に対する考察のしかたを学び、さらに自身で日本語を考究する。
	日本語学特殊研究	3	◎	○			文学書やキリシタン資料を読んで、その作品の書かれた時代の日本語を研究する。
	書道文化特講	3	◎	△		△	中国書道史に関連した特殊講義を展開し、後半はその美を追体験させるべく実技を加える。受講生の調査・研究の深化を目指した講義とする。鑑賞にも配慮し、充実した魅力ある内容とする。
	書道文化特殊研究	3	◎	△		△	日本書道史に関連した特殊講義を展開し、後半はその美を追体験させるべく実技を加える。受講生の調査・研究の深化を目指した講義とする。鑑賞にも配慮し、充実した魅力ある内容とする。
	書論	3	○	○		○	主に中国で、また日本に於いても編述された書道に関連する論、「書論」の解析を通じてその文化性・歴史性・思想性への認識を深める。書論が歴代の書道作品の評価や、実践的な制作に寄与してきたかを確かめ、現代を含めた書道一般への見識を高める講義とする。鑑賞にも配慮し、充実した魅力ある内容とする。
	日文実践演習１	3	◎	○	◎		日本文学科の諸領域において取り扱う作品や資料を正確に解読することを目標とする演習方式の授業である。具体的には、作中の語彙を辞（事）典類により調査するだけではなく、用例を確認し当該語彙が使用される文脈をも視野に入れた上で正確な理解に導く。また、文学作品であれば、「語り」の分析を行い何故そのような視点によって作品世界が展開されているか等を考察する。それらの過程を通じて、日本文学科で卒業論文（研究）を書くための基礎的な能力を養う。この授業では特に、古典文学・日本語学・書道の分野において上記内容を学習する。
	日文実践演習２	4	◎	○	◎		日本文学科の諸領域において取り扱う作品や資料を正確に解読することを目標とする演習方式の授業である。具体的には、作中の語彙を辞（事）典類により調査するだけではなく、用例を確認し当該語彙が使用される文脈をも視野に入れた上で正確な理解に導く。また、文学作品であれば、「語り」の分析を行い何故そのような視点によって作品世界が展開されているか等を考察する。それらの過程を通じて、日本文学科で卒業論文（研究）を書くための基礎的な能力を養う。この授業では特に、近現代文学・日本語教育の分野において上記内容を学習する。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
学科専攻	専門ゼミ１	5	◎	○	◎		卒業論文・卒業研究執筆に向けて、テーマを決定する、先行研究を確認する、必要な参考資料を探す、等の準備作業を実習する。各受講生の選んだテーマについて、段階を踏んで作業を進め、発表してもらう。受講生が相互に発表内容を検討しあい、内容を深めていく活動が、授業の中心になる。
	専門ゼミ２	6	◎	○	◎		卒業論文執筆のための作業を、段階を踏んで進めていく。適宜、注番号のつけ方などを説明する。講義と文献読解などの実習をおりまぜて授業をすすめる。
	卒業研究ゼミ１	7	◎	○	◎		「4年間の学問の総仕上げ」をコンセプトとして、自らの研究をまとめた卒業論文(50枚)又は卒業研究(30枚)の完成に向けて作業を進めていく。
	卒業研究ゼミ２	8	◎	○	◎		「4年間の学問の総仕上げ」をコンセプトとして、自らの研究をまとめた卒業論文(50枚)又は卒業研究(30枚) を完成させる。
	卒業論文	8	◎	○	◎		課題を発見し、分析し、それを叙述で表現するという諸過程で、自己実現・自己表現能力を養っていく。特に、論旨の体系性を重視し、50枚(20000字)を一つの主題を追求できる学力を養成する。
	卒業研究	8	◎	○	◎		課題を発見し、分析し、それを叙述で表現するという諸過程で、自己実現・自己表現能力を養っていく。特に、論旨の体系性を重視し、30枚(12000字)を一つの主題を追求できる学力を養成する。
	日本文学情報処理	2	△		△		日本文学、日本語学、書道文化を研究する上で必要となるパソコンの使い方を身につける。インターネットの検索サイトを用いたさまざまな検索方法、論文収集のための検索術、収集した情報の文献管理サイトを用いた整理方法、テキストエディタの正規表現を用いた置換の方法、Excelを用いたCSVでの情報整理などを、実習を交えて学ぶ。また、Wordを用いた応用的な文書作成方法についても学習する。これらの学習は、たんに日本文学、日本語学、書道文化を研究する上だけでなく、社会に出たときにも実務的に役立つ。
	比較文学	3	○	○		◎	哲学・思想・文化と文学の関係について、日本近代に中心的な視座を据えつつ、世界文学との関わりを考察する。明治以後、西洋の文化や思想が大量に輸入され、日本の様相が大幅に変化した。それは政治や風俗のみならず、文学においても同様である。講義では、日本文学における西洋の影響を検討する際の着眼点や、直接的な影響関係になくとも日本文学と西洋文学を比較する研究手法を紹介しつつ、日本文学と西洋文学の関係について具体的に考察する。
関連	書道３	3	◎	△		△	仮名の実習と、漢字かな交じり書の実習。日本独自の仮名の美を臨書を中心に探り、その表現方法を学ぶ。さらに、詩文書の基礎を学び、臨書から創作まで幅広く学習する。中学校の書写、高等学校の書道の指導ができるような力をつけることが到達目標。仮名は、細字の学習が中心となるが、太字のかな表現も含め、漢字かな交じり書の創作等、充実した魅力ある講義とする。
	書道４	4	◎	△		△	篆書・隷書の実習。文字学の基礎を学習し臨書を中心に、太字・細字とも数多く学ぶ。篆書については、書道史上の基本的な歴史や用語を理解させた上で、用筆・字形等、技術に関連した学習をする。隷書についても、文字学の基礎の上に、技術の習得をめざす。半紙だけでなく半切にも挑戦し、充実した魅力ある内容とする。
	書誌学	3	◎	○			書誌学の基礎を修得するとともに、近世出版文化の実態について理解することを目標とする。この授業では、書誌的な把握を通して、商品としての文学、出版・版本のあり方について考察していく。近世文学がそれまでの時代の文学と大きく相違する特徴のひとつは、文学が商品として製作・流通・享受されるようになったことである。たとえば、京都の本屋同士の間においても重板や類板といった問題が頻発し、それは京都のみならず、大坂・江戸三都間に及ぶものであった。当時の本屋仲間の記録を解読しながら、そうした問題についても考える。
	美術史１	3	△	◎		◎	中国美術史の講義。中国美術の中心をなすのは、書と絵画である。ことに書は、中国を中心として日本や朝鮮など東アジアの漢字文化圏で著しい発展を遂げた独特の芸術である。鑑賞に配慮し、充実した魅力ある講義とする。
	美術史２	4	△	◎		◎	日本美術史の講義。中国からの影響を受けながらも独自の発展をとげた日本美術。和様漢字や、かなの発見と展開をはじめとして、和紙や料紙にも魅力ある工芸的手法を確認することができる。鑑賞に配慮し、充実した魅力ある講義とする。
	日本語教育教材・教具法	3	◎			◎	日本語教育の現場で利用されている教材・教具・教育機器について知見を広める。そのため、まずは、様々な総合教科書、あるいは分野別の教科書について、その特徴を研究する。その後、現在、多様化してきている学習のニーズに応じた教材や教具の選択方法について考える。更に、実際に自ら教具を作成することにより、その効果的な使い方を探る。

区分	科目名	履修開始セメスター	1 日本語学・日本語教育・文学についての専門的な知識・教養、あるいは書道文化についての専門的な知識・技術を社会の幅広い分野で役立てる力を備えている	2 日本以外も含めたさまざまな地域の歴史や文化と、文芸の関わりについて、知識と見識を備えている	3 口頭あるいは文章によって、適切な日本語を用い、的確に自己表現する力、他者の言葉を理解し、お互いを分かり合う力を備えている	4 日本の文化と異文化を相対的に把握でき、国際社会の中で相互理解する力を備えている	科目概要
関連	日本語教授法１	4	◎			◎	まず、日本語を教える上での全体的な問題を取り上げる。その後、音声、文字・語彙、文法、聴解、会話、読解、作文などの各項目に関する基礎的な知識を整理し、具体的な教え方について考える。更に、初級、中級、上級、超級といったレベル別の教え方について総合的に考える。
	日本語教授法２	5	◎			◎	日本語教授法１に続き、音声、文字・語彙、文法、聴解、会話、読解、作文などの各項目に関する基礎的な知識を整理し、具体的な教え方について考える。更に、初級、中級、上級、超級といったレベル別の教え方について総合的に考える。
	日本語教育教壇実習１	5	◎			◎	日本語（初級）の授業を行うための教案を書き、教材を作成し、実際に模擬授業を行うことで、実践力を身につける。
	日本語教育教壇実習２	6	◎			◎	日本語（中級、上級）の授業を行うための教案を書き、教材を作成し、実際に模擬授業を行うことで、実践力を身につける。
	日本語教育文法１	3	◎			◎	日本語文法における形容詞、動詞、助詞、助動詞などの品詞は日本語教育でどう扱われているのかについてまず、考える。その後、日本語を教える上で必要な知識となるテンス、アスペクト、自動詞と他動詞、授受表現、名詞修飾、複文、使役、受身、可能、敬語、文体など主に初級を教える際に必要な文法について考える。
	日本語教育文法２	4	◎			◎	日本語教育文法１では、初級の日本語教育文法の理論について考えたが、ここでは、それらをコミュニケーションのための日本語教育文法として捉え直し、聞くための日本語教育文法、話すための日本語教育文法、読むための日本語教育文法、書くための日本語教育文法という４つのスキル別に考える。また、中級以上のレベルで必要な知識である複合辞（複合助詞、複合助動詞）についても考える。
	日文キャリアプログラム（国語科教員系）	5	◎		○		国語科教員志望者を対象として、教育課題を解決する力と教科の指導力を養成するため、テーマを設定して、提案・提起・実践演習を実施する。特に採用試験合格のための基礎教養を身につけさせる。具体的には「教科・国語」を中心とした教職教養を概論として説明し、現代文を中心とした国語表現のための修辞法に関する指導案作成と模擬授業を行い、その上で教員採用試験（教科部門）の模擬試験を実施する。
	日文キャリアプログラム（文芸創作系）	5	◎		○		散文による創作を行う。構想の立て方、取材の方法、パソコンなどの機器の活用法という基礎的なことから、実際に文章を書き、受講生がそれを読み合って相互に批評、その後にさらに推敲して完成を目指す過程を実習する。実習では、自分の書いたものがどのように読まれるかに重点を置き、独善を排した文章の作製を目指す。受講生の創作過程において、教師は助言者、批評者としてかかわりながら、作者の特色が伸びてゆく指導につとめる。
	日文キャリアプログラム（書道創作系）	5	◎		○		将来、書道科教員・書道関連研究者・書作家をめざす人を対象とした内容。教育実習・教員採用試験・大学院受験にも対応させる。基礎から発展させ、創作できるまでの力を養成する。公募展の現況や、対策等についての内容を含めることにより、創作活動への意識を高め、あわせてレベルの高い実力を持った人物を育成すべく、大作への挑戦もする。硬筆への対応についても充実したものとする。
	日文キャリアプログラム（日本語教員系）	5	◎		○	◎	国内・外で外国人を対象として日本語を教授できる基礎知識と学力を、日本語の仕組みと発想に基づき講義する。
	日文キャリアプログラム（出版情報系）	5	◎		○		マスコミ･出版関係･編集者などを志望する学生を対象としてインタビューをまとめる力、また文書を校閲できる学力などの養成を目指す。具体的には、取材先に関する事前の情報収集と情報の整理、また録音した音声を文字に起こす際の技術(スキル)、さらにはできあがった原稿の校正チェックに関する技法等、出版、編集における能力を養成する。